

3 ヨコバイ（サカキ害虫）の発生状況の調査

（県単：R1（2019）～）

森口 辰也

1 はじめに

近年、県内のサカキ生産地で葉に白点が無数に生じる被害が発生し続けている。被害に起因する害虫を捕獲し、九州大学に同定を依頼したところ、原因は他県でも被害が発生しているオビヒメヨコバイ属の新種と同定された（以下、「ヨコバイ」という。）。なお、このヨコバイは標準和名をサカキブチヒメヨコバイ（学名：*Stictotettix cleyarae*）と命名された（紙谷ら 2020）。

白点が発生したサカキは商品価値が低下することから、適切な防除が必要となる。ヨコバイの生態や薬剤試験については他県において既報の成果があるものの、佐賀県における被害の実態を把握することで効果的な防除に寄与することを目的として、県内の被害状況を調査した。

2 調査方法

試験地（表-1）で葉の被害の進行状況の調査を行った。前年度とは異なる立木10本を選定し、それぞれ約0.5m高、約1.0m高、約1.5m高の枝を1つずつ選び、葉の数とその内被害にあった葉数を調査した。試験地は平林地区、北大久保地区、長葉山地区の3地区を設定し、平林地区には令和3年4月に粒剤A（登録農薬）を、長葉山地区では令和3年12月に乳剤B（登録農薬）を散布した。北大久保地区は無処理地区として設定した。なお、白点が1点以上ある葉は被害葉とし、令和2年に展開した葉（以下、「2年葉」という。）と令和3年に展開した葉（以下、「新葉」という。）は区別した。また、調査対象の枝から枝先側と幹側で任意な葉を1枚ずつ選び、被害の進行具合を被害度として被害度0～5の6段階で評価した（表-2）。

3 結果及び考察

図-1に2年葉の被害率の推移を、図-2に新葉の被害率の推移を示す。被害率は被害葉数の合計を調査対象葉数の合計で除したものとした。2年葉については、4月調査時から約50%以上の被害率であり、0.5m高では約80%の被害率であった。新葉については、前年、一昨年同様に6月から被害が発生し始め、継続的に被害率が上昇し、3月調査時（最終調査）では、いずれの高さにおいても40%以上の被害率となった。

図-3に令和4年3月調査時（最終調査）の2年葉被害度結果を示す。無処理地区と設定した北大久保地区では、約60%の葉が被害度5まで進行した。一方、令和3年4月に粒剤Aを散布した平林地区では、被害度5まで進行した葉は約30%に留まり、被害度3以下の葉が約60%となった。令和3年12月に乳剤Bを散布した長葉山地区では、被害度5の割合は約10%と少なかったものの、被害度1～4の割合が各々約20～30%であった。

平林地区では、春先の段階で粒剤Aを散布しており、今回の結果では無処理地区の北大久保地区に比べると被害度は低かったが、引き続き調査を継続し、その効果を確認していきたい。今後の課題として、散布時期に注意し、年間を通したヨコバイの発生活長に応じた効果的な薬剤散布が必要と思われる。

引用文献

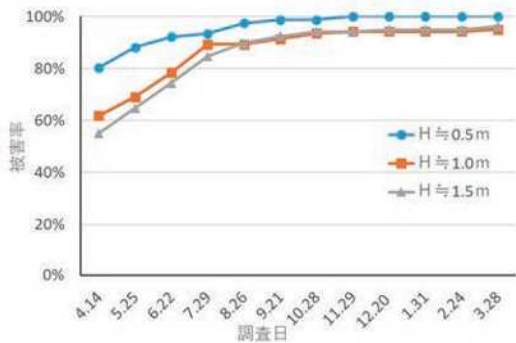
紙谷聡志・大原直通・林正美（2020）：北部九州におけるサカキブチヒメヨコバイ，PULLEX九州・沖縄昆虫研究会会報 No. 99：pp815-816

表一 試験対象詳細

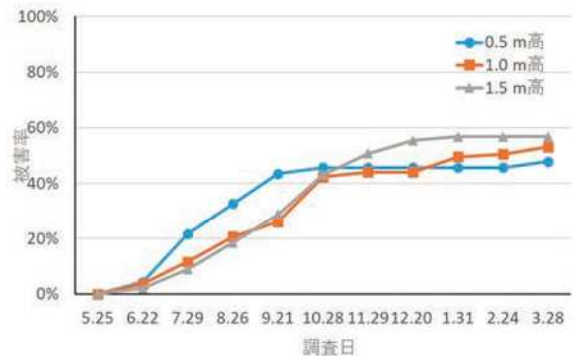
試験地	佐賀県基山町	枝高	調査葉数合計
標高	約170m	2年葉	0.5 76
栽培環境	ヒノキ人工林内		1.0 139
調査対象木	10本		1.5 156
平均樹高	3.7m	新葉	0.5 46
平均胸高直径	3.3cm		1.0 111
			1.5 146

表二 葉の被害度

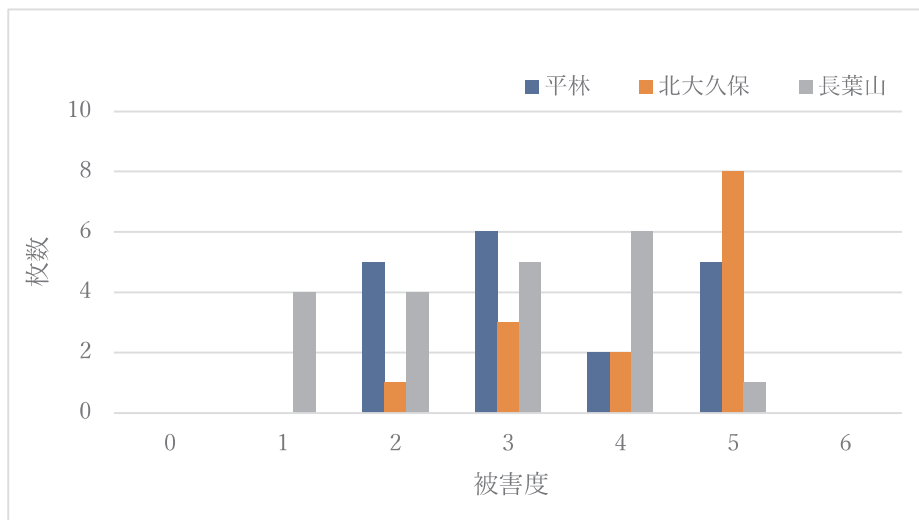
被害度	被害の進行具合
被害度 0	葉に白点被害が0
被害度 1	葉に白点被害が1点以上 目算で10点以下
被害度 2	葉に白点被害が数か所あるものの、葉の一部にとどまっている
被害度 3	まばらではあるが葉の大部分に白点被害が広がっている
被害度 4	葉のほぼ全体に白点被害が広がっている または、葉の一部であるが白斑密度が高い
被害度 5	葉のほぼ全体に白点被害が広がり、総じて白点密度が高い



図一 2年葉の被害率の推移



図二 新葉の被害率の推移



図三 葉の被害度結果 (2年葉)